

『日本教育新聞』一九六九年四月五月頃（日本教育新聞社）

時の
話題



教育欠陥車

矢口 新

欠陥車の問題が突如としてあらわになり、われわれしろうとをあ然とさせた。もつとも知っている人はちゃんと前から予言していた。やがてそういう時が来ることを数年前に教えてくれた人がいた。しかしそれにしてもわからないのは、どうして今までほっかむりしていたのか。経済成長のためにやむを得なかったのか。ごまかしてもなんでも、経済成長をとげればよいのか。もしそうだとすれば、この精神こそ、日本を欠陥車たらしめるものではないか。

教育にも似たようなことが沢山あるのではないか。むやみにふくれ上がった私立大学があるが、それが教育機関として明らかに欠陥車であることは、知っている人は大学の中にも外にもたくさんいたのである。どうしてゲバ棒をふるわれるまで知らぬ顔の半べえをしていたのか、精神の墮落としか言いよう

がない。そういうことで人生が、あるいは社会が生きて行けると、ほんとうに教育関係者は思っていたのだろうか。知っていても欠陥車たることを指摘する勇気がなかったのだろうか。

しかしこれは何も私立大学の例に限らない。多くの大学紛争がみな同じ病状である。大学ばかりでない。高等学校、中学校にも欠陥車は多いのである。受験教育はこまると、あれ程さわがれながらだれも責任回避している。一般両親は欠陥車を好んでいるからしかたがないといわんばかりである。ゲバ棒が必要だなどという人がだんだんふえてくるが、手遅れにならない前に手を打てないのが人間の弱点なのか。ゲバ棒をふるっても考える人は全く真剣なのだ。やむにやまれぬ気持を訴えるのである。一体そういう事態は誰が手術して治療するのか。権力の座にある

人なのか。

社会緊張が次第にエスカレートする気配がみえるのは、多分に、欠陥車がいつまでも欠陥車のままで横行していることにあるのではないか。真剣に、一生懸命考える人は、当然欠陥車を回収すべき役割の人が、何もしないで行くことに対する不満のエスカレーターなのだろう。

一度爆発すると、その社会緊張をおさめるには、権力者もまたゲバ棒をふるわなくてはならぬのだ。機動隊などというのは、権力をふるうゲバ棒の傾向がなきにしもあらずである。そういう末梢的な対症療法で事態を救えないとわかってても、そうせざるを得ないのである。人間の社会の悲劇なのであるか。欠陥車を監視する機関が必要であるように、教育の欠陥車をどうして監視するのか、行政機関がその役割を果たすのが従来の常識だったが、その行政機関が欠陥車だったらどうするのか、現代は明らかにそういう時代なのだ。国会も、国民一般も、みな教育欠陥車を見抜く力がないとしたら、もう教育は、爆発事故を起こす以外、道はないではないか。

（能力開発工学センター常務理事）